ATLAS検出器におけるMissing E_T の実データを用いた性能評価法

日本物理学会 2007年9月24日 北海道大学



<u>大川英希</u>, 金谷奈央子^A, 浅井祥仁, 小林富雄^A, 駒宮幸男



東京大学理学部, 東京大学素粒子物理国際研究センター^A

概要

- LHC加速器とATLAS検出器
- Missing $E_T \ge lt$
- Missing E_Tの性能
 一分解能・スケール・tail
- 実データからの性能評価
 - Minimum Bias事象
 - W事象
- まとめ

LHC加速器とATLAS検出器





LHC加速器はスイスのジュネーブ近郊に位置する欧州原子核研究機構 (CERN)にある周長 27kmの陽子・陽子衝突器

重心エネルギー 14 TeVの世界最高エネルギー

最終到達ルミノシティー10³⁴/cm²s

2008年から14TeVでの本格的な運転開始の予定

衝突点の一つに汎用検出器であるATLA S検出器が設置されている。

長さ44m、高さ22m、総重量7000t

超対称性粒子、ヒッグス粒子、高次元ブ ラックホールなどの発見が期待されている

Missing E_T

カロリメータの横方向エネルギーとミューオンの横運動量のベクトル和

→ 理想的な検出器では相互作用しない粒子の横運動量のベクトル和になる



Missing E_Tの性能評価

Missing E_Tの性能 = 分解能、スケール、tail これらの性能評価のためには、有用なコントロールサンプルが必要

- ・ Missing E_{x.y}の分解能
 - Missing E_{X.Y}の真の値がわかるコントロールサンプルが必要
 - <u>Minimum Bias事象</u> (MissE_T ~ 0の事象)
 - <u>W(→</u>ev,<u>µv)事象</u> (M_TからMissE_Tの情報を得る), Z(→ττ) (M_πから)
- Missing E_{X,Y}のスケール (MissE_{X,Y} / True MissE_{X,Y})
 - <u>W (→</u>eν,<u>μν)事象</u>, Z (→ττ)事象, etc.
- Missing E_Tのtailの評価(本講演では触れない)
 - ミューオンのMissIDに由来するもの
 - 検出器の不感領域でのエネルギー損失

Minimum Bias 事象

Softな非弾性proton-proton散乱

Missing E_Tの性能評価に適している理由

(1) 球状に分布した事象で、かつheavy flavor jet起源のvがいない

→理想的にはMissing $E_T \sim 0$

(2) 断面積が極めて大きい~50 mb





 vの影響はほとんどないことがわかる。
 Mean = 0.06 GeV
 主にaccepatanceの影響が効いている Mean = 3.0 GeV
 上記に加えて検出器の効果が入っている Mean = 4.3 GeV

日本物理学会·2007年秋季大会

Missing E_Xの性能評価 (Minimum Bias)



(SumE_T:カロリメータでの横方向エネルギーのスカラー和)

- ・ 上記のイベント数は、約1日分のデータ量に相当
- <u>分解能は、SumE_Tの関数として記述でき、カロリメータのstochastic termの影響が</u> 支配的であることがわかる

W事象を用いた性能評価

WØTransverse Mass

M_Tのピーク位置 → Missing E_Tのスケール

M_T分布の形 → Missing E_Tの分解能

$$M_{T} = \sqrt{2p_{T}(\nu)p_{T}(\mu)}\{1 - \cos \Delta \phi\}$$

△φ: r-φ平面に対してνとµのなす角度

の情報を持っている。

<u>W事象のM_T分布を用いて, Missing E_Tの性能評価をしたい</u> → W Massは既知とする, leptonの精度はMissE_Tよりもはるかに良い

- テンプレート法
- W(→µν)のモンテカルロジェネレータのµ, vを用いて、Wの M_T分布を再構成する。
- ・ その際に、 $v o p_{\tau}$ に、分解能 $\sigma o \frac{j j \lambda c}{j \lambda c}$ ランダム な補正を加え、スケール α を掛けた分布を各々の α , σ 毎に 用意する(テンプレートの作成)。
- ・ 各々のテンプレートで実データから得られる M_T 分布をフィットし、最も χ^2 の小さいパラメータを求める。

 $MissE_{X} = \alpha \{ p_{X}(v) + gauss(0,\sigma) \}$

α: スケール, σ: 分解能



日本物理学会·2007年秋季大会

分解能とスケールの評価(1)



分解能とスケールの評価(2)



SumE_Tが低い領域での不一致は、 △MissE_Xの分布の形がnon-Gaussianであることに起因していると考えられる(テンプレート法はGaussianを仮定しているため)。

・他のコントロールサンプルから分解能を出し, 上記のテンプレート法でスケールのみ を求める手法も考案中

・バックグラウンドの影響, テンプレートの系統誤差については現在調査中(SumE_Tの 低い領域では, $Z \rightarrow \mu\mu$, $W \rightarrow \tau\nu$, SumE_Tの高い領域ではttbar事象が含まれる)

まとめ

- 実験初期において、実データからMissing E_Tの性能評価を 行なうことは、超対称性事象やヒッグス粒子の探索にとって 極めて重要
- Missing E_Tの分解能は、SumE_Tについての関数として記述でき、カロリメータのstochastic termの影響が支配的であることがわかった。
- Missing E_Tの分解能は, Minimum BiasとW事象のコント ロールサンプルから評価できる。
- Missing E_Tのスケールは、W事象から評価できる。

backups

Minimum Bias 事象

ほとんどBiasを掛けずに選ばれた事象 → 実験的には全ての事象が含まれるが、non-diffractive事象を指すことが多い

全事象の断面積

 $\sigma_{tot} = \sigma_{elas} + \sigma_{sd} + \sigma_{dd} + \sigma_{nd}$

elas: elastic, sd: single-diffractive, dd: double-diffractive, nd: non-diffractive



Minimum Bias事象は、球状に分布した事象で、かつエネルギーインバラ ンスが少ないので、Missing E_Tの分解能の評価に適している。

$W(\rightarrow \mu \nu)$ Template



M_{T} Distributions for various W p_{T}



Jacobian peak is stable for various W p_T .

Shape of the distribution is especially unstable in the low $M_{\rm T}$ region against W $p_{\rm T}$

 \rightarrow Fitting range should not be taken too wide



Not much correlation is seen between W p_T & SumE_T.

→ Making different Templates in each $SumE_T$ region is not so effective.

W(→µv) テンプレート法におけるBGの寄与

Normalized to Integrated Luminosity = 11.6 pb⁻¹

	SumE _⊤ 0~50 GeV	SumE _⊤ 50~70 GeV	SumE _⊤ 70~110 GeV	SumE _⊤ 110~150 GeV	SumE _⊤ 150~200 GeV	SumE _T 200~300 GeV	SumE _T 300~600 GeV
W (→μν)	13.1k	6.91k	13.1k	11.3k	10.5k	9.64k	3.31k
	(91.2%)	(83.2%)	(94.2%)	(95.1%)	(96.0%)	(97.8%)	<mark>(90.8%)</mark>
ttbar			0.2 (1e-5)	1.2 (0.01%)	8.6 (0.07%)	71.7 (0.7%)	288 (7.9%)
W (→ τν)	580	684	361	313	223	87.1	29.0
	(4.0%)	(8.2%)	(2.6%)	(2.6%)	(2.0%)	(0.9%)	(0.8%)
Z(→μμ)	657	658	407	242	178	48.9	13.8
	(4.6%)	(7.9%)	(2.9%)	(2.0%)	(1.6%)	(0.5%)	(0.4%)
Z(→ττ)	30.7	50.5	39.4	24.4	26.7	7.1	3.3
	(0.2%)	(0.6%)	(0.3%)	(0.2%)	(0.2%)	(0.1%)	(0.1%)

In almost all SumE_T region, about 90% are from the signal. Low SumE_T range $\rightarrow W \rightarrow \tau v \& Z \rightarrow \mu \mu$ are dominant BG High SumE_T range \rightarrow ttbar is dominant BG

MET Offline Monitor

Minimum Bias events are also useful for Missing ${\sf E}_{{\sf T}}$ monitoring

(1) Effects from detector misalignment (CSC-01-02-00 used here)

(2) Effects from detector failure (right figure)

→ Effects are seen on Missing $E_{X,Y}$ & Missing E_T 's ϕ direction

Missing E_{τ} 's ϕ distribution



from https://twiki.cern.ch/twiki/bin/view/Atlas/CaloCellWeightAna

